

成城〈乙〉・〈丙〉・〈丁〉本所収「地蔵舞」の性格と用語

小林 千 草

一 はじめに

成城大学図書館蔵『狂言集』^(注1) 一四冊中、

請求記号

登録番号

1 成城〈甲〉本 [4] 9 1 2 ・ 3 / K Y 3 / 4 (W) Y 0 9

2 成城〈乙〉本 [5] 9 1 2 ・ 3 / K Y 3 / 5 (W) Y 0 9

3 成城〈丙〉本 [1] 9 1 2 ・ 3 / K Y 3 / 1 (W) Y 0 9

4 成城〈丁〉本 [2] 9 1 2 ・ 3 / K Y 3 / 2 (W) Y 0 9

5 成城〈遠山氏〉本 [3] 9 1 2 ・ 3 / K Y 3 / 3 (W) Y 0 9

6 成城〈和泉流台本〉群 [3] 9 1 2 ・ 3 / K Y 3 / 3 (W) Y 0 9

7 成城〈鷺流台本〉群 [3] 9 1 2 ・ 3 / K Y 3 / 3 (W) Y 0 9

8 成城〈一まとまりのグループ〉群 [3] 9 1 2 ・ 3 / K Y 3 / 3 (W) Y 0 9

9 成城〈筆者は和泉流台本およびそれに深く関わる台本群〉群 [3] 9 1 2 ・ 3 / K Y 3 / 3 (W) Y 0 9

は、一まとまりのグループを成し、大蔵流台本群^[1]や鷺流台本群^[2]に対して、筆者は和泉流台本およびそれに深く関わる台本群^[3]

と呼んでいる。5には、「遠山氏」という蔵書者名が入っており、それに基づく命名であるが、1〜4は、私に付した略称である。しかも、図書館の受け入れ番号と相前後するものもあるが、基礎調査をした際の書誌的・内容的な関連性に基づいた並べ換えであることを御理解願いたい。

このうち、1（成城〈甲〉本）については、

I 小林千草二〇一六・三「成城〈甲〉本における「ぜあ」——その実態と狂言台本としての性格——」（『東海大学紀要文学部』第一〇四輯）

を、2（成城〈乙〉本）については、

II 小林千草二〇一八・三「成城〈乙〉本「縄ない拔書」の資料的性格と言語」（武蔵野書院刊『近代語研究』第二十集）

を発表している。今回の考察は、2・3・4に共通して見られる狂言「地蔵舞」に関する資料的、用語・表現的考察である。

二 「乙」本「地藏舞」について

成城「乙」本「地藏舞」が和泉流台本のどれに最も近いかを見るために、和泉流台本の主要な台本である、

i 天理本・狂言六義（寛永〳正保へ一六四五前後）頃書写）

ii 和泉家古本・六議（承応二年へ一六五三）〳元禄六年へ一六九

三）山脇和泉家三代目元信道甫書写）

iii 波形本（天明六年へ一七八六）頃早川幸八書写）

iv 雲形本（文政年間へ一八一八〳一八三〇）頃山脇和泉家七代

目元業道鮮書写）

v 三百番集本（和泉流三宅派の台本。三宅庄市へ一八二四〳一

八八五）手沢本を主とする）。点略称。

と比較したところ、ivの「雲形本」に最も近いことがわかった。

これは、「乙」本所収の「縄ない拔書」が「雲形本」に最も近い

という結果（小論II参照）とも一致する。

似よりの実態について、以下、いくつかの段をとりあげること

にしたい。

二・一 シテ出家の名乗りと道行

成城「乙」本

① これハ諸国一見の僧て御坐る

愚僧ハいまた都を見物いたさ

ぬ 此度おもひ立都へ上ふと

存る 誠に出家ほと心安ひ事

ハなひ 衣一卷数珠一連さへ

「雲形本」

① シテ坊主（ト書き略）次第諸ヨクわ

れは佛と思へども〳人は何

とか思ふらむ（ト書き略）是は、

諸国一見の者でござる、某い

まだ都を見物致さぬ、此度思

あれは何方へ参ふともまゝ、な
事セあ イヤ此あたりへ来た
れハ日かくれそうな 宿をか
り度ものぜあかイヤこれに高
札がある 何々往來の者に宿
かす事堅禁制なり これはい
かな事 何とした物て有ふそ
イヤ此高札を見ぬ鉢にして
宿をかるふと存る（1才）

ひたち都【へ】のぼらうと存
る、（ト書き略）誠に、出家程心
安物はござらぬ、衣巻巻数珠
一連 あれば、何方へ参うと
侃な事ぢや、（ト書き略）いや、
此あたりへ来たれば、漸日
がくる、（ト書き略）宿をかり
たい物ぢやが、（ト書き略）ハア、是
に高札がある、何々、往來の
人に、堅宿かすべからず、
（ト書き略）是はいかな事、扱々
迷惑な事ぢや、最早日がく
る、何とした物て有うぞ、
いや、思ひ付た（ト書き略）此札
をミぬ鉢にして、宿をからう
と存る、（七62オウウ）

「雲形本」引用に関して

*₁ 原本にある詳細なト書きは、

原則として略している。

*₂ 原本に付けられた振り仮名

も、原則として略している。

*₃ 原本の「ち」の字体は、「ち」

より古態の変体仮名である。

*₄ 【一】内は、見せ消ちされてい

ることを示す。たとへば、
【へ】は、一旦「へ」と記されたものが、見せ消ちされて右脇に「に」と訂正されていることを表わす。

①①は、「地藏舞」の冒頭部、シテである出家が登場し、日が暮れたので宿を借りようとするが禁制の高札を見つけ、一計を案じたところまでである。

上段の①が成城へ乙、本、下段の①が「雲形本」であり、①の本文には、へ乙、本と同一辞句には傍線を、同趣表現には点線をほどこし、似より度を把握しやすくしてある。また、へ乙、本独自の本文（語句単位の時もある）には、①の本文に波線をほどこしてある。

これを見れば、この場面の似より度は^(注6)●●●と高い。へ乙、本のほとんどそのままが、へ雲形本にとりこまれた形で一致する。書写年次的にはへ雲形本が早いので、へ雲形本のような本文を刈り込んだものが成城へ乙、本のようにも考えられるが、それよりも、成城へ乙、本の親本（あるいは祖本）の段階で共通した一写本があり、へ雲形本はその増補形である可能性を考えておきたい。

へ雲形本の前の段階で「都へのぼらう」とあった文を一旦そのまま書写した後、「都へのぼらう」と訂正した跡からも、へ雲形本の親本（あるいは祖本）の段階で助詞「へ」をとっていた可能性を考えたいのである。

また、

②ま、な事セ。あ↓仮な事ぢや。

③宿をかり度ものぜ。あか↓宿をかりたい物ぢやが

という指定辞「ぜあ」と「ぢや」の対立も、実は、和泉元業が書写対象としたもの（親本）では、指定辞「ぜあ」が用いられていたのを、へ雲形本として清書の際に「ぢや」に意図的に変換して書写していったためと推測される。もちろん、へ雲形本の中には、元業がこのような決断をする前に、「ぜあ」をそのまま書写し、のち、見せ消ちを逐一ほどこしつつ、右脇に「ぢや」と訂正した曲もかなり見られる。^(注7)

さて、へ雲形本「地藏舞」の題名の下に、

④笛大小会釈・但・此狂言ニハ・次第・ナシノ事モ、アリ、其時ハ・アシラヒ、ナシ（七六才）

と割注がなされており、成城へ乙、本は、「次第ナシ」（二重線部参照）の演出であり、へ雲形本と相異する。

二・二 亭主を訪ね、宿を断られる

成城へ乙、本

⑤幸これに家居がある 先案内

をこふ シカへちと御免なり

ませう 見なれませぬかとれから御坐つた 旅の出家で御坐る 一夜の宿をかして被下其方ハ在所の入口の高札を見させられたか 何をも存

へ雲形本

⑤先案内をこはうト云、物まう、案内まう

案内まう 表に案内がある、案内とは誰

そト向合 シテ ハア、御免あり

ませ アト これは見馴ませ

ぬが、どれからござつた

シテ 旅の出家でござる、一

しませぬ 安ひ事てハ御坐れ
共此所の大法で往来の人に宿
をかす事ハかたく禁制で御坐
る 夫ハ氣毒て御坐る 乍去
出家の事なれば慈悲にもなり
ませうがとうそかして被下
かたひ大法じやによつてとふ
有てもかす事ハなりませぬ
すれはとう有てもなりませぬ
か 中く 扱々なんきな所
へ来か、つた事セあ 何とし
たもので有ふそ 扱々痛敷事
セあ 何とそ宿をかした物セ
あか イヤ思ひ付た 申様か
ある のふく御坊宿をか
しておまそふそ 夫ハ忝ふ御坐
る こふ通りませうか イヤ
く某が宿をかすでハなひ
向ふに見ゆる辻堂へいて泊ら
しませといふ事セあ 先以て
忝ふ御坐る 愚僧はとれに寝
まして苦敷御坐らぬか此笠
に宿をかして被下 笠を置分
ハ苦敷なひ とれになりとも

夜の宿をかして下され アト
くなたは在所の入口に有
高札は見させられなむだか
シテ い、や何をも見ませぬ
むだ アト 夫なれば尤ぢや、
此所の大法で、往来の人に宿
かす事ハならぬ程に、どれへ
成共ござれ シテ 扱々夫ハ
迷惑な事でござる、最早日は
くれます、何と致した物でござ
らうぞ、出家の事でござれ
ば、慈悲にも成ませうが、何
卒御隠密で、一夜をあかさし
て下さる、事ハ成ますまいか
アト 安事ではあれ共、
かたい大法ぢやに依てなら
ぬ、どれへ成共早う行しめ
シテ すればどう有ても成
ませぬか アト 申く シテ
扱々は是は難儀な所へ来た、
最早日がくる、何とした物
て有うぞ アト あまりいた
はしい事ぢや、のおく御坊
シテ 何でござる アト 宿

置しませ さふならは是に置
ませう(1オーウ)

をかしておませうぞ シテ
夫は忝うござる アト いや
某の宿をかすではない、向ふ
の辻堂へいてとまらしませと
いふ事ぢや シテ 先に忝う
ござる、愚僧はどれにゐても
くるしうござらぬ、此笠は、
師匠より傳た笠でござる程
に、此笠に宿をかして下され
アト 夫は安事ぢや、笠を
置分はくるしうない、どれに
成共おかしめ シテ 夫は忝
うござる、左様ならば是に置
ませう(七62ウー63ウ)

⑤⑤は、①①に直統するセリフで、シテの出家が目に入った家を訪ねて亭主に一夜の宿を懇望するも断れる場面である。⑤⑤の本文を比較するに、この場面も、へ乙本の独自本文は「幸これに家居がある」、「ちと」「乍去」「が」のみで、へ乙本のほとんどがそのままへ雲形本にとりこまれた形であり、似より度は二・一の場面よりはほんの少々落ちる(その理由は、へ雲形本の増補量)ものの●●程度に高い。⑤では、へ雲形本のセリフが増えて、より細やかに描かれている。
このことについては、へ乙本の親本(あるいは祖本)の段階でのへ雲形本の親本(あるいは祖本)との交流が想定される。

また、〈乙〉本の独自本文「幸これに家居がある」は、〈波形本〉に「是に家がある」と出ている以外に、

⑥シテ諸國修行の坊主で御座る。某末だ上方を見物致さぬ。此度思ひ立ち都へ上らうと存ずる。先づそろり／＼と参らう。シカ。誠に。出家と申す者は心安い事^{コト}で御座る。衣衣^{ぎもい}一重珠^{いづ}数一聯あれば。どれからどれへ参らうと儘で御座る。いや

是迄参つたれば日が暮れ^{くれ}さうになった。宿を借りたものぢやが。何やらこれに高札^{たかふだ}がある。先づ讀うで見よう。なに／＼。往來の獨り旅人に宿を貸す事。堅く禁制なり。わあ。これは宿を貸すなと書いてある。何としたものであらうぞ。いやこの高札を見ぬ體で宿を借らうと存ずる。幸ひこれに家がある。先づ案内を乞はう。^{常の如}（下203頁204頁）

のごとく、幕末期書写の三百番集本に二重線3として見出され、かつ、前場面（①）における二重線1・2のきわめて微細な語句の似よりにも注目すると、幕末期という時空の中で、〈乙〉本は、三百番集本とも何らかの関わりをもつものであったことがわかる。

⑤⑤には、「扱々痛敷事^{せあ}」↕「あまりいたはしい事^{ぢや}」のように、指定辞「ぜあ」と「ぢや」の対立があるが、この背景については二・一で述べたことと同じである。

成城〈乙〉本では、二・一場面の①でも「往來の者に宿かす事堅禁制なり」のごとく「禁制」を使っていたが、⑤でも「宿をかす事ハかたく禁制で御坐る」と「禁制」の語にこだわっている。

二・一場面で「禁制」を使うことは〈波形本〉にも見られ、か

つ、成城〈乙〉本に書写年代の近い三百番集本（例⑥参照）にも見られる。なお、二例ともに「禁制」を使うのは、大藏流の虎寛本・虎光本に見られる。成城〈乙〉本「地蔵舞」は、これらの影響を何らかの形で受けた可能性がある。

〈雲形本〉は⑤において、「此笠は、師匠より傳た笠でござる程に」とし、それ故、「此笠に宿をかして下され」と亭主に頼みこんでいる。このような笠についての由緒づけは、天理本・和泉家古本にも〈波形本〉にもない。ところが、三百番集本になると、「師匠の譲りの笠で御座る。迎ももの事に。座敷の真中に置いて下され」（下204頁）のようにあるし、大藏流の虎寛本・虎光本には「此笠は師匠より譲られた笠で御ざるに依て」（^{座ル}（^{右脇}内が）とある（^{注9}）^{（虎光本の異同）}）とあるので、〈雲形本〉段階、あるいは三百番集本段階で大藏流詞章と何らかの影響関係があったものと見られる。成城〈乙〉本は、笠の由来をセリフとしては反映させずに、その意味では和泉流の古い台本の伝承を重んじたものと推定される。

⑤⑤において、出家に宿を断つた亭主は、さすがに気の毒に思つて、「向ふに見ゆる辻堂へいて泊らしませといふ事^{ぢや}」「向ふの辻堂へいてとまらしませといふ事^{ぢや}」と次善策を示しているが、この件は、天理本・和泉家古本など、和泉流の古い台本からあるものである。ただし、〈波形本〉、三百番集本には欠けている。

二・三 立ち戻つて笠の下に居直つた出家を、亭主見つける

成城〈乙〉本

— 〈雲形本〉

⑦^(主10)座敷に人影かミゆる 内の

者でハなひか これはいかな
事 最前の御坊セあ のふ
く御坊 宿をかす事ハなら
ぬといふになせ夫においや
る こなたのかまハせらるゝ事
ハ御坐らぬ 某か内にいて身
共のかまふ事てなひとハ こ
なたハ最前此笠に宿をかした
でハなひか いかにも笠ハ預
た 夫ゆへ愚僧ハ此かさに宿
をかしました そふあらハ笠
より外へ出た所ハ何とおしや
る 切てなり共はつゝてなり
共置せられ 夫こゝか出た
出ハ致さぬ こちらが出た
出ハいたさぬく シカく笑
扱々おもしろひ御坊セあ 此
上は大法を破て宿をかそふほ
とに笠をぬいでゆるりと居さ
しませ(1ウゝ2オ)

⑦^ア

アト いや、今人が通る様に
有たが、ト云ナガラ、立、やい
座敷に人影が見ゆるが内の者
か、ト、シテヲ、見テ、 是はいかな
事、のおく御坊、シテ何
でござる アト宿をかす事
はならぬといふに、なぜ夫に
お居ある、シテ こなたのか
まはせらるゝ事ではござらぬ
アト いや爰な者が、むさ
とした事をおせある、某が内
にゐて、身共がかまふ事てな
いとハ何とした事ぢや シテ
こなたは最前、此笠に宿を
かさせられたではござらぬか
アト いかにも笠は預てお
りある シテ 夫故愚僧は、
こなたにかりは致さぬ、此笠
に宿を借りました、かまはせ
らるゝ事はござらぬ アト
何とおせある、笠に宿をかつ
たとおせあるか シテ中
く アトやれく御坊は
才覚な事をいふ人ぢや、夫な

らば、其笠より外へ出た所は
何とおしある シテ切てな
り共はつつてなり共とらせら
れい、アト心得たト書き略 夫
ならバ爰が出たト云テク、クト
シテ い、や出は致まい
ト書き略 アト爰が出た シテ
出はいたすまい アト爰が
出た シテ出はいたさぬ
アト爰が出た シテ出ハ
いたさぬ アト笑、扱々
御坊は面白人ぢや、此上は大
法を破て、宿をかしておませ
うぞ シテ 夫は誠でござる
か アト申く シテやれ
く 夫は忝うござる アト
笠を取て緩とおゐあれ(七64
オゝ65オ)

⑦^アは、⑤⑤のあと、屋敷より退出の挨拶をしてから、こつそ
り屋敷に戻り笠の下に居直ったシテ出家を、亭主が見つける場面
である。
⑦の独自本文は「最前の御坊セあ」のみで、(乙)本のほとん
どがそのまま(雲形本)にとりこまれた形であり、似より度は
二・二の場面より落ちる(その理由は、(雲形本)の増補量)も

のの●●○程度に高い。⑦では、〈雲形本〉のセリフが二・二場面よりさらに増えて、特に、笠からはみ出た部分を指摘する会話が増幅されている。

「扱々おもしろい御坊セ。」あ↑「扱々御坊は面白人ぢや。」の対立も、前場面同様、生じている。また、「夫においやる」↑「夫にお居ある」、「何とおしやる」↓「何とおしある」のごとき、ヤ音とア音の対立も生じている。この音の対立は、〈乙〉本所収の他曲でも生じている。

二・四 亭主の寢酒につきあう出家

成城〈乙〉本

⑧扱それかしハ寢酒をたふるか
御坊も一ツ参らぬか 先以て
忝ふハ御坐れとも愚僧は飲酒
戒をたもちまするに依て酒を
たふる事はなりませぬ それ
は永ひに奇特な事で御坐る
そふあらハそれかしハたふる
ほとに御坊ハ見させられ 心
得ました 孟持出 何と一ツ参
らぬか 愚僧ハたへますまい
さふあらハ某ハたべふそ
れかよふ御坐ろう ツギ吞 ア、
一ツのふたれはおもしろひ
平に参れ とふ有てもたふる

〈雲形本〉

⑧アト／＼のおく御坊 シテ／＼何
でござる アト身共は寢酒
をたふ 一ツ参れ シテ忝
うはござるが 愚僧は飲酒戒
をたもつて 酒をのむ事はな
りませぬ アト扱々夫は殊
勝な事でござる 夫ならば某
は給う (下書き略) シテ兎も斯
もさせられ (下書き略) アトハア
先壺つのうだが ちと参らぬ
か シテ只今申通でござる
のむ事はなりませぬ アト
扱もく奇特な事でござる
夫ならば最壺つたべう シテ

事ハなりませぬ さふあらハ
某ハ最一ツたべふ よふ参る
事セあ ツギ吞 のめは呑ほど
面しろひ のふ御坊 其様に
いたすとも是非とも一ツ参れ
いのふ さふあらはたふる事
ハなりませぬかちと吸ませう
か ハア吸分ハ苦敷御坐らぬ
吸分ハ大事御坐らぬ さふ
あらハこれへ 御坊へさしま
セふ いた、きませう てう
と吸せられく 御坐るく
ノム 扱々よひ酒で御坐る
氣に入らハ最一ツ吸せら
れ さふあらハ最一ツ吸ませ
ふか (2ウ・3オ)

／＼よう参る事ぢや、下書き略
アト／＼是は獨のうでは面白
くない 壺つ杯は大事有ま
い びらに参れ シテハア
其様に いはせらるゝなら
ば のむ事ハなりませぬが
ちとすふても見ませうか
アト／＼すふ分は大事ござら
ぬか シテ／＼すふ分は大事ご
ざらぬ アト夫は一段ぢや
それならば 是をこなたに進
ませう シテいただきませ
う (下書き略) アトさあく調
度すはせられ (下書き略) シテ
を、ござるく (下書き略) ほ
是は先 調度請ました アト
／＼其通でござる シテ吸ま
す アト／＼すはせられい
を、中くよい吸振でござる
シテほ アト何とござつ
た シテ扱々是はよい酒で
ござるのお アトハア【お】
氣にいつたらば いか程もす
はせられ シテ左様ならば

最一つすひませうか（七 66 才
く 67 才）

⑧⑧は、家に泊めてもらったシテ出家が少し仮眠したのち、大声で勤行ごんぎょうをしたので、亭主があわて出て来て小声でとたしなめたあと、寝酒の件を伝えた所から始まり、ついに出家が酒を飲めないが吸えると言うに至る場面である。

⑧⑧を見ると、へ乙本に独自本文がかなりあり、かつ、へ雲形本にも増補文がかなりあるので、似より度は、●●○、もしくは●●○あたりに落ちている。

「よふ参る事セ。あ。」↓「よう参る事ぢや。」の対立が、今回の場面でも生じている。

⑧⑧において、亭主は「寝酒をたぶ（る）」と断って、まずは礼儀として出家に酒を勧めている。「寝酒」については、古い台本である天理本・和泉家古本、つづく成立であるへ波形本には無く、これらでは、

⑨ていしゆ・よさむなホドニ・さけを壺ツ・申さうと云テ・なふく・よさむな・さけを壺ツまいれト云（天理本 上 107 才）

⑨アトノ扱扇ヲヒロケ持テ出・夜さむな酒を一つまいれト云（和泉家古本 98 頁）

⑨アトノあまり夜寒にござる程に酒を壺つまいらぬか（へ波形本 14 才）

のごとく、全て「夜寒（な）」がキーワードとなっている。「夜寒」だと、「地蔵舞」という狂言ドラマの設定が、晩秋・冬・初春に限られ、春・夏・秋のまつ盛里には不似合な文句となる。そ

こで、より汎用性を出すために、へ雲形本や成城へ乙本、そして、三百番集本は、「寝酒」を採用したものと思われる。

二・五 出家、地蔵舞を舞う

成城へ乙本

⑩⑩最初のハ短ふて見たらぬ 今度ハ長ひ事を舞せられ もはやゆるして被下 さふいはすとも平に舞せられ さふならは御酒にもたへゑひまするもはや時分もよふ御坐るに依て愚僧ち蔵舞にいたしませうこなたハ地蔵舞を見まいなくといふてはやして下され心へました 地蔵舞を見まいなく 地蔵か住し處ハ 地蔵まいを見まいなく からたせんに安養界 舞ニナル（3 オウウ）

へ雲形本

⑩アトノ（下書き略）扱最初の舞はみじかうて見たりませなむた程に、今度は長事を最一さしまはせられい シテ殊の外酒も酔ます程に、最早免て下され アトはてさういはず共、ひらにまはせられいシテ左様ならば、愚僧は悴の時、地蔵舞といふ事をならひました。最早時分もようござる程に、さらば是を舞立にしませう。こなたははやして下され アト心えまし

酒を吸う」という名目で、亭主の寝酒につき合っていた出家

と亭主の酒宴がしばし描かれたあと、この⑩⑩の場面に至る。狂言「地蔵舞」の最終場面でもある。

成城〈乙〉本には独自本文（波線）があるものの、〈雲形本〉との似よりは、二人の会話部分に關しては●●●と高いが、最後の「地蔵舞」の謡いが全て記されていないことを考えると、●●●に落ちこむ。

天理本や和泉家古本で「抜書」として伝承され、〈波形本〉〈雲形本〉にあり、三百番集本にも載せられている「地蔵舞」の謡い詞章が、成城〈乙〉本に欠けている。アドの亭主役を演ずるものにとっては、囃子詞を台本セリフ中で教えられもする（波線部）ので、この台本で事足りるが、シテとして出家を演ずる役者にとって、〈乙〉本は致命的な欠点を有することになる。

次に問題になるのは、〈乙〉本で、囃子詞が「地蔵舞」を見まいなくであるのに対し、〈雲形本〉が「地蔵舞をみさいなく」であることである。〈乙〉本の「見まい」は、助動詞「ます」の命令形「まし」の変化形「まい」を付加させて、軽い敬意をこめた命令であり、〈雲形本〉の「見さい」は、助動詞「さる」の命令形「され」の変化形「さい」を付加させて、親しみと軽い敬意をこめた命令である。

この囃子詞にのみ限定すると、

⑪見まいな……天理本抜書・和泉家古本抜書・〈波形本〉・成城

〈乙〉本・三百番集本

◇成城〈丙〉本・成城〈丁〉本

※参考 大蔵流 虎寛本・虎光本

見さいな……〈雲形本〉

※参考 大蔵流 虎明本

となつてゐる。

二・六

二・一―二・五まで、「地蔵舞」をドラマの流れに添って五場面見てきたが、成城〈乙〉本と〈雲形本〉の似より度は、平均して高かった。しかし、囃子詞の相異（見まいな）↓「見さいな」、「地蔵舞」謡い詞章の完全性の有無について大きな問題を有していた。これについては、次に扱う〈丙〉本・〈丁〉本に關わつてくる問題でもある。

三 〈丙〉本「地蔵舞」について

成城〈丙〉本「地蔵舞」が和泉流台本のどれに最も近いかを見るために、成城〈乙〉本「地蔵舞」、および和泉流台本の主要な台本であるi vと比較したところ、iiiの〈波形本〉に最も近いことがわかった。

似よりの実態について、以下、いくつかの段をとりあげることにした。

三・一 シテ出家の名乗りと道行

成城〈丙〉本

⑫是は東國かたの者て御座る

それがしいまた都を見物いたさぬ 此度思ひ立都へ登らふと存る シク誠に若い時に

〈波形本〉

⑬シテ是ハ東國方^{イイタ}の者でござる

某未都を見物いたさぬ 此度おもひ立登らうと存^{シテ}シテいかさま若^イ時旅を

旅をいたさねは老ての物語か
出来ぬと申によつて此度登る
杜幸ひなれ 名所旧跡をも見
物いたそふと存る イヤ是迄
参つたれハはや日が暮かゝた
やどをとらずハ成まい 爰に
高札がある なに 往来
の人に宿かす亘堅く禁制也
是ハいかな亘 是ハ先なんと
した物であるふ まづしらぬ
ていて宿をかつてミようとぞ
んする (7才)

⑫⑬は、「地蔵舞」の冒頭部、シテである出家が登場し、日が暮れたので宿を借りようとするが禁制の高札を見つけ、一計を案じたところまでである。

⑫⑬の傍線部・点線部を見れば、〈丙〉本と〈波形本〉の一致はきわめて高く、〈丙〉本の独自本文(波線)も語句単位のもの三つのみ、また〈波形本〉の独自本文も「扱々きのどくな事じや」「や」のみであるから、似より度は、ほとんど●●とみなすことができる。

シテ出家の次第謡がないのは、両本共通で、かつ、成城〈乙〉本もこの点では同じであった(二・一参照)。

成城〈乙〉本(ひいては、〈雲形本〉も)においてシテ出家が「諸国一見の者」と名乗ったのに対し、〈丙〉本(ひいては、〈波

いたさねは老ての物語がない
と申程に此度登ルこそ幸なれ
靈仏靈社残なくおがミめぐ
ろふと存ル いや是まできた
れハ日が暮かかつた 宿を取
らずハなるまい イヤ是に高
札か有ル 何々往来の者に
宿借ス事かたく制禁なり 是
ハいかな事 扱々きのどくな
事じや 何とした物で有ふ
や 先しらぬていて宿をかつ
てめうと存ル (13才)

形本〉も)では、「東國かたの者」と名乗っている。これに関し
て、
⑬諸国一見の僧……成城〈乙〉本
諸国一見の者……天理本・和泉家古本・〈雲形本〉
諸国修行の坊主……三百番集本
東国方の者……〈波形本〉・成城〈丙〉本
※参考
遠国がたの者……大蔵流 虎明本
遠国方の出家……大蔵流 虎光本
坂東方の出家……大蔵流 虎寛本
という「ゆれ」が見られる。〈波形本〉・〈丙〉本の「東国方の者」という限定は、大蔵流虎寛本の「坂東方の者」という限定に近い。

⑫⑬の「若い時に旅をいたさねは老ての物語か出来ぬと申」ので「此度(都へ)登る」というのは、成城〈乙〉本や〈雲形本〉にはない設定である。古い台本である天理本・和泉家古本にもないし、のちの三百番集本にもない。ところが、大蔵流だと、
⑭虎明本…惣じて、出家と申者ハ、わかひ時修行を致て、学文を仕らねハ、年よつて口がきかれぬとぞんじて、思ひ立て御さる。(二53頁)

⑭虎寛本…誠に、皆人の申さるゝは、若い時旅を致さねば老ての物語りが無いと仰らるゝに依て、ふとおもひ立て御座る。(下65頁)

⑭虎光本…イヤ誠に皆人の被仰ルハ若い時旅を致ねば年寄ての物

語りが無いと申二依而ふと思ひ出(立)て御座ル。(四三二頁)
のごとく、最も古い台本から近世中・後期の台本まで、このセリフを有している。和泉流へ波形本へ段階での大蔵流との何らかの影響関係を推測すべきであろうか。

なお、成城へ丙へ本は指定辞「ぜあ」が用いられず、「じや」専用である。

三・二 亭主を訪ね、宿を断られる

成城へ丙へ本

⑮物申 御案内申 (注13)「イヤ表に案内か有 案内とハたそ

「旅の出家て御座る 一夜の宿をかしたされい」「それハ、安い亘てハあれとも此しくの入口に高札があつたかお見やれなんだか」「イ、や見ませなんだ」「みさせられねは尤じやか此所の大法にて一人旅に宿かす亘ならぬによつてどれへ成共行せられい」「夫は氣の毒な亘て御坐る 去ながら出家の亘て御座るによつてとふぞ宿をかして下されい」「今申通りで御座るによつてどれへなりとも行せられい

へ波形本へ

⑮是に家が有 アンナイエ アト シテの出家てござる 一夜の宿をかして下されい アト安イ事

でハござれ共こなたハ此宿の入口に有高札を見させられなんだか シテいや見ませなんだ アト見ませられねハ尤じやか此所の大法で往来の人に宿かす事ハなりませぬ、どれへなりともいてとまらせられ シテ夫ハきのどくな事でござる 乍去出家の事でござる程にこなたの後生にもなりませう程にどふぞかして下されい アトいや今云通じやに依てなりますまい

「惣あらは此笠を明日迄おとめなされて下されませう

「笠程の亘は安い亘で御座る

どれへ成共おかせられい

「そふあらハ爰におきませう

(7ウ・8オ)

どれへ成ともいてとまらせられい シテ夫ならハ此笠を明日までとめて下されい アト

「笠ほどの事ハ安イ事じや、

どれに成ともおかせられい

シテ夫ならハ爰ニおきませう (十3オウ)

⑮⑮は、⑫⑫に直続するセリフで、シテの出家がとある家を訪ねて亭主に一夜の宿を懇望するも断れる場面である。

へ丙へ本の独自本文「物申……案内とハたそ」は、へ波形本へで「アンナイエ アト出ル 常ノごとく」と略された部分のセリフ化であり、これを除外すると、「それハ」「によつて」という語句単位の相異となり、へ丙へ本とへ波形本への似より度は、三・一場面よりはやや低い●●ぐらいを想定できるであろう。

へ丙へ本とへ波形本へには、

⑮去ながら出家の亘て御座るによつてとふぞ宿をかして下されい
↑ 乍去出家の事でござる程にこなたの後生にもなりませう程にどふぞかして下されい

という「によつて」「ほどに」の対立が見られる。原因・理由を表わす接続助詞(相当句)「ほどに」「によつて」の国語史的消長については、

III小林千草一九七三・九「中世口語における原因・理由を表わす条件句」(『国語学』第九四集)

IV小林千草一九七七・三「近世上方語におけるサカイとその周

辺」(武蔵野書院刊『近代語研究』第五章)

〔III、IVともに、「中世のことばと資料」
一九九四年十一月武蔵野書院刊〕に所収

において論じたように、「ほどに」は後件に命令表現をとる場合のみ「によって」の勢力をおさえていた時期があった。それを適用すると、〈丙〉本は、後件が命令文であっても「によって」が使われている。それは⑮だけではなく、

⑮今申通りで御座るによつてどれへなりとも行せられい (〈丙〉本 8 才)

でも生じている。また、〈波形本〉では二文であったものを一文にしたため、あらためて〈丙〉本でつけ足された接続助詞の例である、

⑮此所の大法にて一人旅に宿かす支ならぬによつてどれへ成共行せられい (〈丙〉本 8 才)

も、後件が命令表現なのに「によつて」を用いている。^(注1) ということは、〈丙〉本の「ほどに」「によつて」の状況は、〈波形本〉のそれよりも後の時代の様相を反映していることになる。狂言のセリフとしては〈波形本〉を踏襲していても、このような助詞レベルでは台本の書写された時代、その台本が演じられた時代の言語層を反映することがあるが、これはその一事例である。

なお、〈丙〉本にはなく〈波形本〉にはある「是に家が有」というセリフについては、二・二で言及している。

三・三 立ち戻つて笠の下に居直つた出家を、亭主見つけ

成城〈丙〉本

〈波形本〉

⑮何やらちらりとした ¹されは

こそ ²爰の御坊は 宿かす事ならぬとい、しになぜにそこにおいやるそ「そなたハ最前笠に宿をかしたては御坐らぬか」「いかにも笠にハ宿をかしました「愚僧ハ又笠に宿をかりました」「扱くおかしき支をおしやる 笠より出たところが有ならバなんとさせらる、「切てなり共はつてなりとも取らせられい」² 扱くおかしき支をおしやる「それ 爰かみへます」「それみへます」「夫みへます」³「夫みへます」「夫みへます」⁴「夫みへます」⁵「それくく」⁶「笑 能く宿をかりたそふな 此うへは大法を破つて宿をかしてしんじませう(8ウー9才)

⑮アト何やらちらりといいたやうなが ¹されバこそ宿

かす事ならぬと云になぜにそこにおいやるぞ ²「愚僧ハそなたに宿を借りいたさぬ ^{アト}身共の内にいながら宿をからぬとはとふした事をおしやる ^{シテ}そなたハさいぜん此笠に宿をかさせられたでハないか ^{アト}いかにも笠にハ宿をかしました ^{シテ}身共ハ此笠に宿をかりました ^{アト}さてくおかしき事をおしやる 笠より出た所が有らハなんとめさる ^{シテ}切てなりともはつてなりとも取らしもう ^{アト}夫こ、が出て有ハ ^{アト}夫見へますまいが ^{アト}夫 ^{シテ}夫くくく ^{アト}扱もそなたハ笑しい人じや ^{アト}くく宿が借り度さふな ^{アト}此上ハ大法をやぶつて宿をかしてしん上ぞ(十3ウー4才)

⑬⑭は、⑮のあと、屋敷より退出の挨拶をしてから、こっそり屋敷に戻り笠の下に居直ったシテ出家を、亭主が見つける場面である。

〈丙〉本⑬の独自本文は、波線1〜5である。波線1は、それがあつた方が舞台にリアリティーが出るセリフの添加である。波線3〜5は、〈波形本〉のように「夫」「夫」と単語単位で詰めていくよりも、短い一文としてやりとりした方がこの場面が面白く映ると感じた台本作者の演出によるものである。波線2は、同趣表現が順不で「扱もそなたハ笑しい人じや」と出ているので、独自本文としてカウントせずにすむものかもしれない。

一方、〈波形本〉の「愚僧ハそなたに……とふした事をおしやる」という独自本文は、〈乙〉本や〈雲形本〉にもあるセリフのルーツとして〈波形本〉が有していたものを、〈丙〉本が伝承していないだけである。

このような背景を考えると、〈丙〉本と〈波形本〉の似より度は、●●○となろう。

ことば・表現の問題であるが、〈丙〉本の波線3〜5では「見える・見えない」がキーワードしてくり返されているところが、〈波形本〉では「出る・見えない」で対応している。ところが、和泉流台本を広く見るに、

⑳出る・出ない……天理本・和泉家古本・〈雲形本〉・三百番集本

成城 〈乙〉本
成城 〈丁〉本^(注15)

出る・見えない……〈波形本〉

見える・見えない……成城 〈丙〉本

のごとくなっており、成城 〈丙〉本の「見える・見えない」は、きわめて特殊であることがわかる。〈丙〉本の親本（あるいは祖本）の段階で〈波形本〉の影響を受けた際、二つ使われているうちの「見える」を意図的にとり出したわけである。「笠より身体の一部が出る／出ない」ではなく、「笠の下に隠れるはずの身体の一部が見える／見えない」に重点を置いて表現していった結果である。

なお、〈丙〉本・〈波形本〉ともに、亭主と出家のこの軽妙滑稽なやりとりの中で、丁寧語「ます」を伴っていることが注目される。

三・四 亭主の勧める酒につきあう出家

成城 〈丙〉本

②あまり夜さむに御座るによつて御坊に酒をしんじませう

ア、のふく御坊

「なんで御座る」「余り夜寒に御座るによつて酒を一ツまいれ」

夫は忝けのふ御座るが愚僧は御授戒をたもつに仍而酒を呑む支はなりませぬ

ニヨコ「扱くそ

なたは殊勝な支じや そふあらハ身共一人してのもふ

〈波形本〉

②ア「あまり夜さむにござる程に御坊に酒を壺つふるまわふと存ル」

のふく御坊

「なんてござる」ア「あまり夜寒にござる程に酒を壺つまいらぬか」

シテ「忝のふはござれども愚僧ハおんじゆかいをたもちまするによつて酒をのむ事ハなりませぬ」

ア「扱々夫はきどくな事でござるの」

夫ならハ身共ひとりた

「ア、のふく」⁴「なんで御座る」⁶「酒をのむ事はな
りませぬかちとすいませう
「扱くざれ吏をはたさぬ人
じや サアのませられい
「先御亭主から初めさせられ
い「惣あらは身共が戴きま
せう「チャウト参れく
「シテ此盃を御坊へ進しま
せう「愚僧戴きませう
「チャウト参れく」¹⁰「ア、
御座るく」¹²「シテ此盃を
御亭主へ進しませう」¹³「身
共が戴きませう」¹⁴「チャウ
ト参れく」¹⁵「ア、又一ツ
請ました（9ウー10ウ）

②⑪は、家に泊めてもらったシテ出家が勤行をし始めた頃、夜寒だから出家にも酒を進めようと出て来た亭主と出家の会話であり、出家が酒は飲めないが吸えと言ったので酒盛りが始まる場面である。

まず、成城へ丙へ本②の独自本文について述べる。

成城へ丙へ本②にはト書きが少ないが、波線3によって、出家がまだ小声で経を誦していることが知られる。へ波形本へには、この部分に経を誦する旨のト書きがないが、これ以前、引用しな

べませふトカエル シテ のふ
く モデル のむ事ハならぬ
がちとすいませうか アト
さてくざれ事をはたさぬ人
じや 夫ならハまいれ 先御
亭主からはじめさせられい
夫ならハはしめませふ
トノミ シテ さあくまい
坊主へサス 下書き略（十4オーウ）

かった五行分の最後に、「シテやれくうれしやく」先つとめをいたそふ ちんくく「アト立テ盃ヲ経持む」とあるから、経を誦している設定は変わらない。ただし、成城へ丙へ本の方が、波線1「ア、」が入っていることで、シテ出家が一心不乱に経をあげている最中に声をかけることのためらいが籠められており、リアルな言語描写となっている。

波線4「ア、」は、波線1の「ア、」とはニュアンスを異にするものの、「のふく」の前に一呼吸「ア、」があることで、人をひきとめる現実の行為が彷彿とする。波線5が入るのも、現実の会話らしきが増す。

波線6「酒を」は、目的語を明確にする働きをもち、波線2の「夫は」と同様、へ丙へ本がきちんとしたセリフのやりとりを文字化することに意を用いている姿勢を示すものであろう。

波線7ー15は、全て、酒盛りにおける両者の会話であり、へ波形本へは、略したト書きの中で、これに準じた場面の進行がしぐさの指示により示されている。

へ波形本へには独自本文がないので、へ丙へ本の独自本文を重く見ると、へ丙へ本とへ波形本への似より度は、●○ぐらいとさう。

へ丙へ本②もへ波形本へ②も、「あまり夜さむに御座る」が、亭主が酒宴を思いつく理由となっているが、二・四、特に⑨⑨で示したように、これは天理本・和泉家古本・へ波形本への特徴であり、へ雲形本へや成城へ乙へ本・三百番集本では「寝酒」が動機であり理由となっていた。

さて、三・二で、〈丙〉本が「によって」優勢、〈波形本〉が

「ほどに」優勢傾向について言及した。この②①においても、

②あまり夜さむに御座るによつて御坊に酒をしんじませう↑↑あまりに夜さむにござる程に御坊に酒を壺つふるまわふと存ル

③余り夜寒に御坐るによつて酒を一ツまいれ↑↑あまり夜寒にござる程に酒を壺つまいらぬか

④愚僧は御援戒をたもつに仍而酒を呑む夏はなりませぬ↑↑愚僧ハおんじゆかいをたもちまするによつて酒をのむ事はなりませぬ

のように、その傾向が依然、認められる。〈丙〉本の場合、③の後件は命令文であるから、本来は「ほどに」が来てもよいところである。一方、〈波形本〉の「ほどに」後件は、②が意志表現、

③がもちかけの疑問表現をとるが、勧誘表現であり、命令表現以外でも「ほどに」が活躍している姿をしるべし。また、④は、

前件も事実の叙述、後件も意志的表現を兼ねた事実の叙述であり、「によって」が当初から有していた機能分担で、ここから

「によって」の勢力が発進され拡大していった領域である。〈波形本〉で使われていても何ら問題を生じない。

三・五 出家、地蔵舞を舞う

成城〈丙〉本

②⑤ ^{シテ}受持たか最前の舞ハあまり短かつた 今度はチト長い舞をまわせられい 「そふ

あらは愚僧も能きげんになつ

〈波形本〉

②⑤ ^{アト}／さいせんのハあまりミしかかつた 最壺つ長イ舞ヲ

まわせられぬか ^{シテ}／夫ならハ愚僧もよいきげんにな

て御座るによつて爰に地蔵舞といふ物か御座るか是を

まわふ程にそなたは地蔵舞をみまいな〜といふてはやいで下されい 「心得た 地蔵

舞を見まいな〜 「地蔵のすむ所は「地蔵舞を見まい

なあ〜 (12オウウ)

酒を吸う」という名目で、亭主の振る舞酒にに応じていた出家と亭主の酒宴がしばし描かれたあと、この②⑤の場面に至る。狂言「地蔵舞」の最終場面でもある。

成城〈丙〉本の独自本文（波線部）、そして、〈波形本〉の独自本文（傍線部や点線部以外）の存在を考慮すると、二本の似よ

度は●●○ぐらいであるが、最後の「地蔵舞」の謡いが〈丙〉本にないことを重んじると、●○○ぐらいに落ちこむ。

天理本や和泉家古本で「拔書」として伝承され、〈波形本〉〈雲形本〉にあり、三百番集本にも載せられている「地蔵舞」の謡い

詞章が、成城〈乙〉本同様、〈丙〉本にも欠けている。アドの亭

りましたによつて爰に地蔵舞と云事がござる 是を舞ませ

ふ程にそなたはやいて下され ^{アト}／心得ました ^{シテ}／

目出度舞おさめにいたしまふ ^{アト}／一段とよふござろう

^{シテ}／さあ〜はやさせられい ^{アト}／地蔵舞を見まい

な〜 ^{シテ}／地蔵の住所ハ ^{アト}／地蔵舞を見まい

な〜 ^{ト盛テ}持立 ^{シテ}／からだせんにあんやうかい（以下、地蔵

舞の詞章とト書き略す）（14ウ）

5才）

主役を演ずるものにとって、囃子詞を台本セリフ中で教えられもする(波線部)ので、この台本で事足りるが、シテとして出家を演じようとする役者にとって、乙 本同様、丙 本は致命的な欠点を有することになる。

二・五で問題になった、乙 本「地蔵舞を見まいな」⇕雲形本「地蔵舞をみさいな」の対立は、丙 本と波形本に生ぜず、ともに「地蔵舞を見まいな」で問題はない。ただし、丙 本では、二回目の囃子詞を「見まいな」と末尾音の母音を長く引いて謡っているところが特徴的である。

三・六

三・一―三・五まで、「地蔵舞」をドラマの流れに添って五場面見てきたが、成城乙 本と波形本の似より度は、前半は非常に高く、後半はやや低めの所とかなり低いところが混在していた。

四 丁 本「地蔵舞」について

和泉流宗家直伝の弟子ではなく、それでも演者として公演が許されている者が、成城乙 本・丙 本のような台本をすでに所有している状況下で、狂言「地蔵舞」のシテを演じたい(つまりは、自分たちの番組として「地蔵舞」全体を上演したい)と思った時、問題は、「地蔵舞」の謡い(舞)詞章の入手である。こういった舞の詞章は、狂言が流派(大蔵・和泉・鷺流)に分かれる前から存在していたものが多く、和泉流以外でも「地蔵舞」の台本(完本)があれば、それから採ればよいことになる。実際

にそのような経過があったか不明であるが、現在一グループとなっている成城大学図書館蔵『狂言集』2群に収められている、

4 成城丁 本

所収の「地蔵舞」を、三流の主要台本と比較したところ、大蔵流虎光本に最も近いことが判明した。本節では、その実態をいくつかの段に分けつつ報告する。

四・一 シテ出家の名乗りと道行

成城丁 本

②⑥ 我ハ佛とおもへ共ハ人は何
とか思ふらん 是ハ遠国方の
出家て御さる 某未都を見物
致さぬ^ニ仍而此度思ひ立都へ
登と存 先^一そろり^ノと参
實^ニ若時^ニ旅を致さねは老て
の咄かないと申^ニ仍而ふと思
ひ立て御さる 是ハ如何事
殊外西か隠そうに成た^ニ急
て里近くへ参ろう 誠^ニ加様
之事ならハ跡の宿てやとを
かろう物を 知ぬ^ニ所とて迷惑
いたす事て御坐る イヤ是^ニ
制札か有 何々往来之旅人^ニ
宿かす事堅く禁制也 南無三
宝 往来の旅人と有しハ身共

大蔵虎光本

②⑥ ^{シテ次第} 我ハ仏と思へ共
ハ人ハ何とか思ふらん
「是ハ遠国方の出家で御座ル
某いまだ都を見物致さぬ^ニ依
而今度(此度)思ひ立都
(を)見物致ふと存ル。先急
で参ふ。イヤ誠^ニ皆人の被仰
ルハ若イ時旅を致ねば年寄て
の物語りが無いと申^ニ依而ふ
と思ひ出(立)て御座ル。是
ハいかな事。程も参らぬに日
が暮た。是と存たならハ跡の
宿で宿を借ふ物(ものを)。
何と致ふ。イヤツウト(ツウ
ツと)あれに灯が見ゆる。急
であれへ参て宿を借ふと存

か事しや 何と致そうそ イ
や先知らぬ分にして宿をかる
ふと存 (58才)

ル。かふ参ても宿を借て呉れ
バ(くるれハ)よふ御座ルが
若借て呉ぬ時ハ参た詮も無イ
事で御座ル。イヤ参る程ニ是
ニ高札が御座ル。何く往來
の者ニ宿を借事難禁制也。是
ハいかな事。往來(の)者と
申ハ(申せは)則我等ことき
の者で御座るが何と致ふ。イ
ヤ知ぬ体で案内を乞うと存
ル (四32~33頁)

②⑥は、「地蔵舞」の冒頭部、シテである出家が登場し、日が暮れたので宿を借りようとするが禁制の高札を見つけ、一計を案じたところまでである。

上段の②⑥が成城<丁>本、下段の②⑥が虎光本であり、②⑥の本文には、<丁>本と同一辞句には傍線を、同趣表現には点線をほどこし、似より度を把握しやすくしてある。また、<丁>本独自の本文(語句単位の時もある)には、②⑥の本文に波線をほどこしてある。

②⑥の本文中の()は、底本ですでに橋本朝生氏によつて対校された関西大学図書館蔵「文政五年岡田信言書写明治四十一年橋本賀十郎転写大蔵虎光本」(以下、関西大本と略称)の校異である。これを見ると、「此度」「思ひ立て」「借ふもの。」「往來の」の四ヶ所に関して、<丁>本は関西大本により近いことがわかる。

<丁>本の独自本文(波線部)、虎光本の独自本文(傍線・点線部以外)と点線部の微細な状態とを勘案すると、<丁>本と虎光本の似より度は●●○ぐらいであらうか。

②⑥の波線1に関して、虎寛本・山本東本にもあり、江戸後期の狂言道行の常套表現でもあるので、<丁>本で新たにつけ足されたとしても、それほど不思議なことではない。

なお、<丁>本・虎光本は、「我ハ佛とおもへ共く人ハ何とか思ふらん」というシテ次第により始まっている。これは、虎明本・虎寛本も、山本東本も同じである。また、②⑥では「高札」ではなく「制札」を用いているが、これについても、すでに虎明本に「参る程に、是にせ。いさつが有よ」(二54頁)と出ている。

四・二 亭主を訪ね、宿を断られる

成城<丁>本

②⑦物申案内申 表に物申と有

案内とハ誰殿 方て御坐る
ろさい——ろさい乞程の物
か案内を乞といふ事の有もの
か 私ハ遠国方の出家て御
さる 一夜の宿を置て下され

夫ハ安事しやか此村はつ
れの制札ハ見なんだか 何と
も存しませぬ 此村の大法て
旅人ニ宿かす事禁制ておりや
る 夫ハ左様てハ御座ろう

大蔵虎光本

②⑦シテ「物申案内申」アト「いや

表ニ物申と有ル。案内とハ誰
そシテ「物申」アト「どなたで
御座ル」シテ「ろさい申ふ」アト
「是ハいかな事。案内を乞者
がろさいをかふ」と言事が有

物カシテ「行幕た執行者で御
座ル。一夜の宿を借て被下イ
ア「安ひ事でハ有れ共此入
口に高札の有た(有高札)を
見さしましたか」シテ「イヤ見

か私⁴は出家の事て御されハ別⁵の御利益にも成ましう何卒一夜をかして下されならんといふにハ―されはこそ一通りてハ宿ハかきぬ何とかよかるうそイヤ頼やうか有⁵方便の以て留ふと存申御座りますか⁶イヤ最前⁶の出家ハまだ夫にお居やるかイヤ私ハ⁷出家の事て御されは野伏山伏分な苦う御さらぬか此笠ハ師匠ニ頂て参た笠て御坐るニ仍て⁸雨露ニうたす事なりませぬ何卒此笠を明朝迄預て下され笠斗ならハとれに成とも置て行しめ(58オゝ59オ)

ハ致ませぬ^{アト}「此所の大法で旁のよふな人ニ宿を借事ハ難禁制でおりやる^{シテ}「御大法ハ去ル事て御座ルがひらニ一夜を明させて被下イ^{アト}「いや〳〵某一人で大法を破ル事ハならぬ事ぢや^{シテ}「扱ハどふ有ても成ませぬか^{アト}「いかニもならぬ事ぢや^{シテ}「夫なればバよふ御座ル。私ハ最かふ参り舛ル^{アト}「最早おりやるか^{シテ}「さらバ〳〵^{アト}「よふおりやつた^{シテ}「ア、^{シテ}「是ハいかな事。あのよふな事でハ中〳〵宿ハ借まいが何と致ふ。いや致よふが御座ル。申御座るか御座りまするか^{アト}「誰ぢや。そなた(ハ)まだ行ぬか^{シテ}「かふ参り舛ルが私ハ野ニ伏ても山ニ伏てもいいませぬが此笠ハ師匠の譲られた笠で御座ルニ依而此笠斗り今夜一夜預て被下イ^{アト}

「扱〳〵殊勝な事をおしやる。どれへ成りと置て行かしめ(四333ゝ334頁)

②⑦は、②⑥に直続するセリフで、シテの出家が目に入った家を訪ねて亭主に一夜の宿を懇望するも断れる場面である。

②⑦本②⑦の独自本文は、波線1ゝ9と、かなり多い。そのうち、2・3の「夫ハ」は、指示詞を入れることで、耳で聞いたセリフの理解のしやすさのほかに、この発話者それぞれが逆接の接続詞を使ってこれから相手の言ったこととはちがう事を述べたてゝる際の前プリの始めとして入れたものと考えられる。その意味では、十分考えられた上での添加である。

波線1、波線4、波線7は、相手(亭主)を説得するにあたって必要と思われる「種」を、シテが丁寧にしこんでいるものであり、意味のある添加である。波線5は、出家がこれから亭主に嘘をつくことになるから、仏教上許される「方便」を使うのだと観客に伝えるためのものである。波線8については、山本東本に、②⑧私ハ出家のことぞざれば、野に伏しても山に伏しても苦しうござらぬが、この笠は師匠より譲られた笠でござるによつて、雨露に打たれても、または、人に誘われてもなりませぬによつて、何とぞ一夜預かつて下されい。(下257ゝ258頁)とあつて、大蔵流幕末期の似たセリフの共有を想定することが出来る。しかも、②⑨本と山本東本は、点部が虎光本よりも完全一致し、注目される。

波線9は、次なる場面で、「笠斗」でない状態が出現するから、

ここでこのように「笠斗」と限定しておくことは、ドラマ展開上それなりの効果を見出すことが出来る。

つまり、波線1-9は、全て、必要があつて、へん本でなされているのであり、へん本の台本としての質の高さを感じさせるものであつた。

一方、虎光本²⁷でも、傍線部・点線部以外の部分がかなり多く、虎光本独自本文の展開が見られる（しかも、それら虎光本の独自本文の多くが、山本東本とも共通している）。

このようなへん本と虎光本の状況を勘案すると、二本の似よ度、前場面よりは落ちて●○ぐらいとなろう。

本場面で一番問題になるのは、へん本・虎光本ともに存在する「ろさい（申ふ）」「ろさい（を）乞」という事態である。「ろさい」とは、『日本国語大辞典』（小学館 第二版）に言う、

②ろ・さい〔羅斎・邏斎・囉斎〕〔名〕①仏語。僧が、四方を巡つて托鉢して歩き、供養を請うこと。

*庭訓往来（一二三四一四二八頃）「猶以禪家方者、相伴邏斎之僧」

*言繼卿記・永禄一二年（一五六九）閏五月一二日「豊雅楽頭・守秋朝臣毎月囉斎に可来之由申」

・虎明本狂言・朝比奈（室町末・近世初）「地獄の主、閻魔王、

閻魔王、ろさひにいざや出ふよ」（以下、略）

であり、家々の門で「ろさい」と言つて、内の人が施しをするのを待ち、出て来なかつたらそのまま別の家に向かうのが普通である。

「ろさい」の設定は、大藏流では虎明本から、

③〇あんなひとハたれぞ　ろさい申　いや爰な、そなたハれうじな事をいふ人じや、ろさいをこうものが、もの申をこうほうでおりやるか（二五頁）

とあり、江戸中期の虎寛本も同様である。すでに、本稿第二節や第三節で見て来たように、和泉流には無かつた設定である。²⁸へん本「地藏舞」が、和泉流台本系ではなく、大藏流台本系であることが、この一件で、さらに確かとなる。

四・三　立ち戻つて笠の下に居直つた出家を、亭主見つけ

る

成城へん本

③①ヤイ／＼表二人かけの見ゆる　裏へも表へも人を廻せ爰ハ身共かふせく　出合／＼／＼　是ハ如何事

最前の御坊しや　そなたは誰に断て宿をかるそなたに宿ハかりませぬ　某の内に居て宿をからぬといふ事か有物か　夫ならハ最早此笠を預て下されといふたれハ笠斗ならハおゐて行とハ仰られぬか　いかにハ笠斗ならは置てゆかしめといふた

大藏虎光本

③①「表の座敷二人影が差が誰も行ぬか。何ちや誰も行ぬ。はて合点の行ぬ事て御座ル。是ハいかな事。あれハ最前の出家で御座ル。のふ／＼御坊そなたハ（御坊は）なぜに人の内へ案内無ク（なしに）這入ておりやる　そなたに宿ハ借ハ致ぬ。（な）お構やつそ　「宿をからぬとおしやるが夫程内へはいつてゐるでハ無イか　そなたハ最前此笠を預りわ召れぬか

夫ならハ笠の下ハ笠乃物て
御さる 笠にこそ宿をかれこ
なたニ宿ハかりませぬ 夫な
らハ笠与外へ出た所ハ何とお
しやるそ イヤとも出ハ
しませぬ こちらか出 こう
しますくく アト 扱も
く面白出家しや 大法を破
て宿をかそうそ ヤア夫ハ
実て御さるか 誠しや
心実て御さるか おんて
も無事 夫ハ有難御さる
ト云テぬき 笑 (59 オウ)

③⑪は②⑦のあと、屋敷より退出の挨拶をしてから、こっそり屋敷に戻り笠の下に居直ったシテ出家を、亭主が見つける場面である。

△本③⑪の独自本文は、波線1・14と多い。念のため、虎光本を含めた大蔵流の状況を示すと、△表1△のようになる。

△表1△の◎は完全一致、○は同趣文脈であり、×はその辞句が欠けていることを表わしている。これを見ると、成城△△本

アト「笠ハ預たれ共宿を借ハ致ぬ
シテ「今夜一夜此笠の下ハ某が俣ちや。笠ニ社宿を借たれそ。なだに宿を借ハ致ぬ
アト「是ハ尤な。して其笠より外へ出た所ハ何と召る
シ「切て成共そいで成共とらしめ アト「何ちや切て成共そいで成共とれ
シテ「中くアト「夫なればこちらが出ルハくく
シテ「出ハすまいくくく (アト)「扱も面白イ事で御座ル。大法を破て宿を借ふと存ル。のふく大法を破て宿をかしておまきふぞ
シテ「夫ハ忝ふ御座ル (四35～36頁)

△表1△

波線部 番号	△乙△ 本の辞句	虎光本	宮島本	山本東本
14	裏へも表へも人を廻せ	×	×	×
13	爰ハ身共かふせく	×	×	×
12	出合くくく	×	×	×
11	誰に断て	×	×	×
10	夫ならハ	×	×	×
9	笠斗ならハおゐて行	○	○	○
8	とハ仰られぬか	×	×	×
7	いかにも	×	◎	×
6	夫ならハ	×	×	×
5	斗ならハ	×	×	×
4	夫ならハ	×	×	×
3	夫ならハ	×	×	×
2	夫ならハ	×	×	×
1	夫ならハ	×	×	×
14	心実て御さるか	×	×	×
13	おんて無事	×	×	×
12	誠しや	×	×	×
11	ヤア夫ハ実て御さるか	×	×	×
10	夫ならハ	×	×	×
9	夫ならハ	×	×	×
8	夫ならハ	×	×	×
7	夫ならハ	×	×	×
6	夫ならハ	×	×	×
5	夫ならハ	×	×	×
4	夫ならハ	×	×	×
3	夫ならハ	×	×	×
2	夫ならハ	×	×	×
1	夫ならハ	×	×	×

「地蔵舞」のこの場面における独自性（孤立性）がきわだつた。しかしながら、その中でも、波線1・3の山本東本との完全一致、波線2の同趣文脈の存在、虎光本の一異本宮島本における波線7の「如何にも」の完全一致、波線9の同趣表現「されバ」が、幕末期という同時代台本としての共通性をしのばせる。

亭主が自分の家に何者かが入りこんでいる気配に気づき、盗人かと警戒し、舞台上には登場しないが屋敷の奥に居る者と想定さ

れる家人（使用人）たちへ「爰（玄関口につづく座敷）ハ身共かふせく」「出合くくくく」「出て立ち向かえ」と周囲に注意を喚起する掛け声と大声であわてて騒ぐ様子は、舞台でも「序・破・急」の「破」の入りっぱなしとして目ざましいものである。

このような「盗人の場」は和泉流に設けられていなかったし、大藏流虎光本は「何ちや誰も行ぬ。はて合点の行ぬ事て御座ル」の段階で留めていた。大藏流山本東本が、

③② 留主立って、ヤイヤイヤイヤイ、表の座敷で人影がさすが、誰も行かぬか。なんじや誰も行かぬ。それはさだめて盗人であろう。裏へも表へも人を廻せ。ここはみどもが受け持った。出会え出会え出会え出会え。ハテ合点の行かぬ、人音もせぬが。何としたことじや知らぬ。（下258頁）

のごとく、へ丁本とよく似た「盗人の場」を設定している。

「盗人の場」設定については、大藏流「子盗人」「連歌盗人」などの他曲において同趣設定があるので、へ丁本「地蔵舞」や山本東本「地蔵舞」がこれらを参考にして同場面を再現することは可能である。

へ丁本における波線6・8は、前場面②の波線9で「笠斗ならハ」とあった独自本文からの流れを受けついでいる。逆に言う

と、へ丁本における周到なセリフ構成がここにある。
へ丁本における波線11・14は、大藏流他本ではあつさり済ませている部分を、リアルな会話に仕立てなおしたものである。大法を盾に宿を貸してくれなかった人の心をひるがえすことが出来

た大喜びの出家の心情を、このような会話で描こうとしたものである。

一方、虎光本の独自本文は、「切て成共そいで成共とらしめ」「何ちや切て成共そいで成共とれ」「中く」という、シテ出家とアド亭主の会話である。この会話は、大藏流の他本——虎寛本・虎光本・山本東本にもあった。また、異流である和泉流の「雲形本」⑦、「波形本」⑱にもあった。ということは、成城へ丁本⑦、成城へ丙本⑱にもあったのである。

つまり、流派を問わずあった「切て成共そいで成共とらしめ」一連の会話を、へ丁本が継承していないのである。その理由として、どちらの流派にも属さない台本——ニュートラルな台本を指向した可能性が考えられる。ここの一連の会話をカットした埋め合わせが、へ丁本波線11・14のセリフ群であるとも考えられる。

以上のような独自本文を有する成城へ丁本と虎光本との似よ

四・四 亭主の寢酒につきあう出家

成城 へ丁本

③③ のうく御出家 何事て御さる 某ハいつもね酒をたへる 3 そなたにハ何とあらう 私ハ五戒を保ちますに 仍て温酒ハ成ませぬ 夫は実ニきとくな事しや 夫ならハ

大藏虎光本

③③ のふく御坊 シテハア、もふかしましう申外まい アト「イヤくさふでハ無イ 今宵ハ餘り夜寒なに依而御酒を 一ツ申うと言事ぢや シテ難有ふハ御座リ外ルが私ハ飲酒

身共給ふ^春 御坊一ツ参らぬ⁵ 夫ならハ今一ツ給ふ^春 御坊一ツ合をして下されハア夫ならハ吞事ハ成ませぬ⁶ 吸分な苦う御さるまい 一ツ吸ましやうか 夫がよかろう⁸ 身共の酌をしてやろう⁹ 何と有た¹⁰ 私も有ようハ最前から一ツ吸たい¹¹ 息に吸ましたれはひいやりと覚ました¹² 一ツ吸て風味を見ませう¹³ 夫がよかろう¹⁴ 何と有た¹⁵ 結構な御酒に御さる¹⁶ 是ハ御遠来そ¹⁷ うに御さる¹⁸ そなたハ吸程有てよう覚た¹⁹ 如何にも遠来しや²⁰ さあ²¹ 此方一ツ上りませ²² (59ウー60オ)

③③は、夜の勤行を声高に始めた出家を制すべく出て来た亭主が、出家に酒を勧め宴会となった場面である。

戒を持(たもち) 舂ルに依而酒ハ給ませぬ^{アト} 弥殊勝な事をおしやル。夫なればかふ持て参ふ^{シテ} イヤ(イヤ申) 飲と申てハ成ませぬ^{アト} 吸ぶんハ苦敷御座り舂まい^{アト} 是ハ尤な。夫なれば一ツ吸しめ^{シテ} 夫ハ難有ふ御座ル^{アト} サア 吸しめ^{シテ} 是ハ慮外ニ御座ル。ヲ、丁度御座ル。扱も 是ハよい御酒(酒)で御座ル。今一ツ被下ませふ^{アト} 夫今一ツ参れ^{シテ} 是ハさい 慮外で御座ル。ヲ、亦調度御座ル。ちとこなたへ進ませふ^{アト} 戴ませふ^{シテ} 私ガ杓を致ませふ^{アト} 是ハ慮外で御座ル(おりやる)。ヲ、調度御座ル(有)。又こなたへ進ジ(又そなたへさし)ませふ(四337ー338頁)

〈丁〉本の波線2・3は、酒を勧める主人の第一声であるが、「某ハいつもね酒をたへる」のごとく、〈乙〉本・〈雲形本〉・三百番集本同様「ね酒」がキーワードとなっている。一方、虎光本は、和泉流では天理本・和泉家古本・〈波形本〉・成城〈丙〉本、大蔵流では虎明本・虎寛本・山本東本全てがそうであるように、「今宵ハ餘り夜寒な」がキーワードとなつて、相異している。

〈丁〉本「地蔵舞」は大蔵流台本へのスタンスをとりながら、この亭主の出家に酒を勧める理由づけが、大蔵流的ではなく、和泉流でも少数派である「寝酒」に拠っている。もし、〈雲形本〉や三百番集本でそのようになっていないことを知らない演者にとつては、大蔵流にも和泉流にも属さないニュートラルなセリフであると思ひこめられたであらう。

〈丁〉本③③の波線は、4以下17までである。山本東本と対照させると、波線9のみ、「みどもが酌をしておまそう」と、同趣表現が出ている。③③の破線10・17のセリフは、大蔵流の「悪太郎」では、同趣のセリフ展開があり、かつ、成城〈丁〉本には当該部分をちゃんと含む「悪太郎」が所収されているので、〈丁〉本の台本作者が他の台本との相異をきわ立たせるために、波線10・17を補うことは十分可能である。

一方、虎光本③③を見るに、〈丁〉本との同一辞句を表わす傍線部、同趣表現を表わす点線部がきわめて少なく、虎光本の独自本文が多くなっている。したがって、成城〈丁〉本と虎光本のこの場面の似より度は、●○○ときわめて低くなっている。

四・五 出家、地藏舞を舞う

成城〈丁〉本

③4 最初のハ短て見たらぬ 此度ハ長のをまやれ 夫ならハ¹ 実に出家に似合の舞か御さる 是を舞立に致ませう² 是ハ一段とよからう³ 早²ふ舞¹ハしめ⁴ 心得ました³ 地藏舞を見まいなア¹ 地藏の住し所ハはらゆせん² あんによかい 地藏かきちく生しゆら 人間に山とそつ 廿五坊を廻て 罪の深き衆生ハしやくしやうを取直し かいすくうてハほつたり ついすくうてハひつたり 昔釈迦大師のとうり天へ登りて御説法の御時 忝も如来の金の御手を差上 地藏坊のつむりを三度迄さすつて せんさいなれや 地藏坊¹ 末代の衆生を汝に預置也と 仰を受けて 已来 走り廻り候へと 誰家の人かあはれとて 茶の一

大藏虎光本

③4 乍去今のハ餘りみちかふて見たりませぬ(見足らぬに依て) 今少シ長イ事を舞せられひ(舞てミせさしめ) ^{シテ}「其儀ならバ愚僧ハ酒ニも酔ました程ニ爰ニ愚僧ニ似合た舞が御座ル。是を舞ませふ程ニこなたハ囃子(はやひ)て被下イ ^{アト}「何と申て(何といふて) はやしませふ(はやす)ぞ ^{シテ}「私の地藏舞を見まいな¹と申バ其通りを言てはやいて被下イ ^{アト}「心得ました(心得た)」 ^{シテ}「地藏舞を見まいな¹ ^{アト}「地藏舞を見まいな² ^{シテ}「地藏の住し所³ ^{アト}「地藏の住し所⁴ ^{シテ}「地獄俄愧畜生修羅 人かい 山とそつ天⁵ 廿五部を廻て 罪の深イ衆生を⁶ 錫杖⁷を取直し かいすくうてハ

ふくも呉されは 草臥はつる お地藏 此お座敷へ参りて 間の物て十盃 三斗入て十四はい 縁日に任て廿四盃のうたれは かうしの花か目にのほり あちらへハひよりり ^{シテ}「こちらへハひよりり ^{シテ}「よろよろとよろめけハ慈悲の涙せきあへす 衣の袖を顔に當¹ 六道の地藏の榮なき下を² ころうし ^{トツトツ} イヤ(60ウー61オ)

ほつたり¹⁰ ついたり ついすくうてハひつたり 昔釈迦大士(大士の¹¹の)とふり天へ登て御説法の折節¹² 地藏坊を召れて 忝(忝くも) 如来のこ¹³かねの御手をさし上 地藏坊がつむりを三度迄さすつて 善哉なれや地藏坊¹⁴ 末代の衆生を 汝ニ預置成と¹⁵ 仰を請て 此方 走り廻り候え共 誰やの人が哀れみて 茶の一服も呉やれバ(くれされハ) 草臥はつる御地藏を 此御座敷へ召れて 相の物で十盃 三斗入りで十四盃 縁日に任せて廿四盃呑だれバ かつしゆ(糍)の花が目¹⁹上り²⁰ 左り²¹ハよろ²² ^{シテ}「右ノ方へハよろ²³ ^{シテ}「とよろめけば 慈非の泪せきあへず 衣の袖を顔に当て ^{シテ}「六道の地藏のゑいなき舌を御ろぜ²⁴ ^{シテ}「笛シギリ(シヤギ

リ^{シテ}「イヤア」(四 339 ~ 341 頁)

③④は、「酒を吸う」という名目で、亭主の振る舞酒に応じていた出家と亭主の酒宴がしばし描かれたのちに至った場面である。狂言「地蔵舞」の最終場面でもある。

成城〈丁〉本の独自本文(波線部)、そして、虎光本の独自本文(傍線部や点線部以外)の存在を考慮すると、二本の似より度は、

地蔵舞の詞章以前

地蔵舞の詞章

●●●●●

となろう。

「地蔵舞」の詞章に至る前に、成城〈乙〉本・〈丙〉本でも、

⑩^{再掲} こなたハ地蔵舞を見ま

いなくといふてはやして下

され 心へました(乙)本

3 オーウ

②⑤^{再掲}

爰に地蔵舞といふ物か

御座るか是をまわふ程にそな

たは地蔵舞をみまいなくとい

ふてはやいて下されい「心得た(丙)本12 オーウ」

のごとく、出家は亭主に囃子詞を教えている。これは、ドラマ展開上あった方がよいものであるが、成城〈丁〉本では波線2・3・4のようなセリフを設けたせいか、肝心なこの部分が欠けてしまっている。それが、虎光本③④の独自本文として浮き出ているのである。「地蔵舞の詞章以前」の似より度が●●○と低いのは、それも大きく作用している。

第二節、第三節で見てきたように、成城〈乙〉本「地蔵舞」、

〈丙〉本「地蔵舞」には、「地蔵舞」の具体的詞章は省かれていた。かわりに、

⑩^{再掲} 地蔵舞を見まいなく

地蔵か住し處ハ 地蔵まい

を見まいなく からたせん

に安養界 舞ニナル(乙)

本3 オーウ

②⑤^{再掲}

地蔵舞を見まいなく

「地蔵のすむ所は「地蔵舞を

見まいなあく(丙)本12

オーウ」

という「さわり」のみを見出すことが出来る。なお、〈丁〉本で「はらゆせん」と訛って音を書きとっているのに対し、〈乙〉本は「からたせん」と正しい形であり、〈丁〉本の「あんによかい」に対する「安養界」は漢字表記のまま「あんようかい」と発音した可能性が高く、これも正しい形となる。一方、〈丙〉本が、「見まいなく」の形のほか、〈丁〉本のように最後の母音を延ばした形「見まいなあく」を書き留めていることが注目される。

「地蔵舞」の詞章に関して、③④に点線をつけた部分が、〈丁〉本との微細な異同で、そこにナンバリングをしてあるのは、〈表2〉と関連づけるためである。

〈表2〉の12に「×」とあるのは、〈丁〉本には欠けている辞句であることを示したものであり、他本でもその辞句が欠けている場合は「×」を表示している。

〈表2〉を見ると、

2 住し / 8 深き / 12 ×「地蔵坊を召れて」の辞句欠 / 14 候へと(ど) / 16 御地蔵 / 17 参りて /

22 よろくよろと

点線部 番号	線部																																																																																																																																					
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	成城 〈丁〉本	大 蔵 流	和 泉 流	三 百 番 集 本	鷺 流	狂言記																																																																																																										
なア	住し	はらゆせん	あんにようかい	人間	とそつ	廿五坊	深き	衆生ハ	ぼつたり	御時	×	地蔵坊の 候へと	あはれとて	御地蔵	参りて	あちらへハ	ひよろゝ	こちらへハ	ひよろゝ	と	ころうし																																																																																																																	
な	住	からだせん	あんにようかい	人天	とそつ天	廿五部	深イ	衆生を	ぼつたり	折節	地蔵坊を召れ	て	地蔵坊が	候へ共	哀れみて	御地蔵を 召れて	左りへハ	ひだりへ	よろゝ	右ノ方へハ	よろゝ	と	御ろぜ	虎光本	虎明本	虎寛本	山本東本	天理本	和泉家古本	（雲形本）	（波形本）	二百番集本	保教本	正篇																																																																																																				
すみ	からだせん	あんにようかい	人てん	とそつてん	二十五有	ふかき	衆生を	ひつたり	おりふし	ちさうぼうを めされて	ちさうぼうが	候へど	あはれみ	おちさう	まいりて	ひだりへ	よろゝ	右のかたへ	よろゝ	と	ごらふぜ	な	すみ	住む	御羅陀山	安養界	人・天	都卒天	二十五有	深き	衆生を	ぼつたり	おりふし	地蔵坊を召さ れて	ちさう坊が	候へど	憐み て	哀れみて	お地蔵	参りて	左へハ	よろよろ	右の方へハ	よろよろ	と	ごらうぜ	な	すみ	からだせん	あんにようかい	人天	とそつて	二十こ	ふかき	衆生を	ぼつたり	みぎりに	此くそうをめ されて	ちさう坊が	候へど	あわれみて	参りて	左のかたへ	よろゝ	右の方へ	よろゝ	と	御らうぜ	（みさい）な	×	からだせん	あんにようかい	人てん	とそつて	二十五有	深き	衆生を	ぼつたり	みぎりに	此愚僧を召れ て	地蔵坊が	さふらへど	あはれみて	参りて	左の方へ	よろゝ	右の方へ	よろゝ	と	御覽ぜ	な	住む	御羅陀山	安養界	人天	とそつてん	廿五	ふかき	衆生を	ぼつたり	みぎりに	砌りに	×	地蔵坊が	候へど	憐みて	参りて	左の方へ	よろゝ	右の方へ	よろゝ	と	ごらうぜ	×	地蔵坊が	候へど	憐みて	参りて	左の方へ	弱々	右の方へ	弱々	ト	（六道ノ地蔵 ガ）踊ツタ 見マイナ	×	地蔵坊が （へど）	あはれみ	まいりて	ひだりのかた へ	よろゝ	右のかたへ	よろゝ	と	（ちさうほう ガ）おどつた を見さいの

「表2」

に關しては、大藏流、あるいは和泉流、あるいは鷺流（保教本）や狂言記（正篇）などに同一辞句の存在が見出され、狂言「地蔵舞」というより、大きな伝承母胎の枠の中におさまることがわかる。

しかし、それ以外は、成城へん本が、口頭による伝承をうけ、かつ、それを忠実に表記したため生まれた次のような相異をもっている。

名詞の相異

3 はらゆせん 4 あんによかい 5 人間 6 とそつ 7 廿五

坊 11 御時

助詞の相異

1 なア 9 衆生ハ 13 地藏坊の

表現單位での相異

15 あはれとて 18 あちらへハ 19 ひよろ／＼ 20 こちらへハ

21 ひよろ／＼ 23 こうろし（御覽じ）

「はらゆせん」は、成城へん本でも、「からたせん」であつたものが、へん本でなぜ「はらゆせん」と伝承しているのか、不思議である。「安養界」を「アンヨウカイ」と謡うか、「アン」の「ン」と「ヨ」のyoをioに環元して連声を起こして「アンニョウカイ」と謡うか、当時の師匠にあつても「ゆれ」が想定されるところであるが、へん本は、「アンニョウカイ」をさらに縮めて「アンニョカイ」と謡った形を文字に留める。「人間」の「ニンゲン」は、「人天」の「ニンテン」の訛りであろうか（片仮名書きならば、書写の一過程での誤写の可能性が出よう）。正しくは

「廿五有^ッ」を「廿五坊」とするのも、伝承過程上の訛りか。「御時」は、意味をとれば、いずれでもよい。

へん本の「なア」は、へ表2では孤立した事例であるが、成城へん本に「見まいな」と併存する「見まいなあ／＼」があつたので、謡い方によつては「アー」と長く延ばされた音を聞きとり書きとることの可能性が想定できる。「衆生ハ」は、このままでは誤りとなるが、「衆生ヲバ」という形を経由させて、この「ヲ」が書写上飛んでしまったとするなら、問題は小さくなる。「地藏坊の」は、後になるほど所有格の「が」は「の」へと移行するから、その影響を受けたとみなせる。

「あはれとて」は、意味上は問題ないが、「あはれみて」の誤写もその書写過程上想定可能である。「あちらへハ」「ひよろ／＼」「こちらへハ」「ひよろ／＼」は、一まとまりで孤立しており、へん本における意識的改変が感じられる。もちろん、このような形にいつしか伝承されてきたとも考えられるが、それを良しとしてここに記す際には、台本作者の既存のものとの相異を意識した「行為」を認めたい。特に、「左へ」「右へ」の語をはずし、「あちらへ」「こちらへ」と変えたのは、舞手（演者）が素人であるほど舞いやすい工夫であつたと思われる。また、「よろ／＼」は、

③⑤ 下向いかりをなしつる鬼女なるが、忽ちにより果て、天地に身をつめ眼暗みて、足もととはよろ／＼と、ただよひ廻る、足立原の（安達が原）「元和卯月本謡曲百番」笠間選書70 26 頁

のごとく能（謡曲）にも出る擬声擬態語（オノマトペ）であるので、「ひよろひよると」という漸新なオノマトペを狂言「地蔵舞」に生かそうと、あえて△本が使ったことも想定できる。

△本「ころうし」は「御覧じ」で、動詞の連用形をおだやかな命令形に用いたものであろう。「御覧じろ」の「ろ」を抜いた感覚でもあり、「御覧ぜ」よりも優しい音調を意図したものと思われる。

なお、△本「ほつたり」は、虎光本のような「ぼつたり」、あるいは和泉流天理本・和泉家古本・雲形本・三百番集本や狂言記正篇のような「ぼつたり」であった可能性も残るが、虎寛本・山本東本（山本家現行本）・和泉流へ波形本・鷺流保教本のとき「ほつたり」（ホツタリ）そのままの形を、今は考えておきたい。虎明本の「ひつたり」は珍しい。虎明本では、次に「ついすくふて、ほつたり」とあるので、虎寛本段階で順が逆に入れたえられたものであろう。

四・六

四・一―四・五までの具体的考察で、成城△本「地蔵舞」が大蔵流の虎光本系の本文に多くを依拠していること、ただし、場面によっては、また特に「地蔵舞」詞章に関しては、大蔵流とも和泉流とも異なる△本の独自性をうち出してきている姿を把握することが出来た。

和泉流の周辺役者が当時の宗家（和泉元業）がそうであったように、交流のある大蔵虎光（分家の八右衛門派）の周辺役者から△本のような台本を入手することが可能であったにしろ、何

故、大蔵流にも和泉流にも属さない本文を部分的にしこんできたのかなど、残る問題は多い。

五 おわりに

成城大学図書館蔵『狂言集』②群の△・△・△・△三本に収められた「地蔵舞」について考察を進めたところ、

△本「地蔵舞」……和泉流・雲形本系

△本「地蔵舞」……和泉流・波形本系

△本「地蔵舞」……大蔵流虎光本系

という、それぞれ似より（依拠）の異なる結果が得られた。しかも、△△△は和泉流、△△△は大蔵流である。流派をこえた江戸後期―幕末期の交流は、『狂言大外』等の存在や、『三百番集本』所収の大蔵流八右衛門派の数曲の組み入れなどで多少は予想されるところであるが、その実態は私の専門を大きく超える。

四・六で記した問題点とともに、能楽学会諸氏の御教示を待ちたいと思う。

なお、愛知県立大学図書館蔵『和泉流秘書』所収「地蔵舞」の本文が、成城△本の本文ときわめて近いことが判明した。成城本との似より度は、△雲形本をわずかながら上回ると見られ、同じく幕末期の写本として注目される。また、法政大学能楽研究所蔵『明和中根本』十一所収の「地蔵舞」は、成城△本「地蔵舞」とかなり共通するものをもつ。この現象は、『明和中根本』が△波形本と深く関わるものであることから生じたものであるとともに、△△本そのものがその親本（あるいは祖本）の段階

で、『明和中根本』（あるいは、その親本・祖本）と関わった可能性を示唆する。

注

- (1) 『狂言集』という名称は、筆者の仮称である。大きくは三グループの雑纂的な狂言台本の集まりであるために、論述上、この名称を用いる。
- (2) 〔1〕〔5〕順に並べても、Y093274が欠けているが、図書館のコンピュータ操作上に生じたものらしく、欠本ではない。
- (3) 成城〈甲〉本・〈乙〉本については、論考Ⅰ・Ⅱを含む小著『幕末期狂言台本の総合的研究 和泉流台本編Ⅰ』が清文堂出版より近刊予定。
- (4) 本稿で使用した和泉流台本の底本を、以下、簡略に記す。
天理本……天理図書館善本叢書『狂言六義（上・下・抜書）』（八木書店刊）の影印。
和泉家古本……池田廣司解題・校注「和泉家古本『六義』」（三二書房刊『日本庶民文化史料集成 第四卷狂言』の翻刻。
- 〈波形本〉……小林賢次所持の写真版。
〈雲形本〉……小林賢次所持の写真版。
三百番集本……野々村戒三・安藤常次郎校註『狂言三百番集（上・下）』（富山房百科文庫）の翻刻。
- (5) ただし、「壁下地」「つまばらみ」「お出やりました」「つらり

ッ」と「あたまを」など、〈乙〉本と〈波形本〉が近い状況も散見する。

- (6) 完全一致●●●全く一致せず○○○までを三点満点で表示している。
- (7) 小林賢次二〇〇八・二『狂言台本とその言語事象の研究』（ひつじ研究叢書第61巻 ひつじ書房刊）82頁83頁参照。また、小林千草二〇一六・三（小論Ⅰ）参照。
- (8) 本稿で使用した大蔵流台本の底本を以下に記す。
虎明本……『大蔵家古本能狂言』（臨川書房）の影印。
虎寛本……笹野堅校訂『能狂言（上・中・下）』（岩波文庫）の翻刻。
虎光本……橋本朝生編『大蔵虎光本狂言集（一〜四）』（古典文庫）の翻刻。
山本東本……小山弘志校注『狂言集（上・下）』（岩波日本文庫）の翻刻。
- (9) 虎明本には、この文言はない。
- (10) 成城〈乙〉本所収十一曲中、現代のカギカッコにあたる表示があるのは、「井井」（どぶかつちり）のアド（通行人）の会話つけ足し部分、「醒物」（なまぐさもの）、「鬪罪人」のみであり、「地蔵舞」のこの例は珍しい。
- (11) この部分の〈乙〉本と〈雲形本〉の似より度は●●○である。
- (12) 成城〈丙〉本、〈丁〉本も「見まいな」であることについては、本稿三・五、四・五で触れる。

(13) ⑮の前に位置する⑫は、シテ出家の名乗り・道行という一人

語りであったので、会話記号がなかったが、〈丙〉本「地蔵舞」では、以下、会話に「」が付されている。

(14) ⑫⑬においても、「名所旧跡をも見物いたそふと存る」〔雲仏靈社残なくおがミめぐろふと存ル〕〔此度登る社、幸ひなれ〕〔此度登ルこそ幸なれ〕は、はさみこみという意志表現の場合の「によって」「ほどに」対立が生じている。

(15) 本稿四・三で触れる。

(16) 〈丙〉本だと、「夫は誠に御座るか……奇妙無量ニヨゴくくく」部分で、四行と五行に分かれた。

(17) 驚流の主要台本とその底本については、小林千草二〇一八・一『幕末期狂言台本の総合的研究 驚流台本編』（清文堂出版）参照。

(18) 「文政五年」（一八二二）だと、吉田幸一氏蔵本（古典文庫『大蔵虎光本狂言集』の主本文）より、原本書写年代としては一年早い。ただし、転写年代が明治四十一年と下ることを注意せねばならない。

(19) しかも「出家のことでござれば」は、波線7に当たると一致である。

(20) 『狂言記正篇』（万治三年へ一六六〇）初版「かさの下」にも、「ろさい」の件はない。なお、『狂言記』「かさの下」には、出家の舞の詞章「一のせどのハしだひない人がゑおどらぬ。それにおどれとおしやるうちやうらくに。ひつ」（四二1才。右脇に譜号入り）「ちぞうのすミし所はくおどつたを見さいの」

（四二1ウ・22才。右脇に譜号入り）が全て詞章化され、かつ、謡譜号も入れられているので、成城〈乙〉本・〈丙〉本にそれら詞章が記載されていなくとも、市販の『狂言記』を活用すれば、ある程度の役には立ったことであろう。

(21) 〈丁〉本には、元、「ても某の宿ておりやる」とあったものを、傍線部を見せ消ちして右脇に小字で訂正されたものを、今、本文として反映している。

(22) 伊藤源之丞本。宝暦・明和（一七五一―一七二）頃伊藤源之丞吉高書写。大蔵流八右衛門派の台本。底本は、永井猛・高橋修三校訂『宮島大蔵流伊藤源之丞本（上・下）』（米子工業高等専門学校国語研究室。一九八八―八九年刊）翻刻。

(23) 底本では、補記の形態をとる。

(24) 「相異を意識的に図る」意で、「差別化」という語が新聞でもテレビ放送でも使われているが、私は本稿でも使用しない。私は二〇〇一年頃、公的な答申書にその語を用いることに反対して以来、お役所用語ならともかく一般に広まることを恐れていたが、二〇一八年の現在は、よく使われる日本語の一つとなってしまった。人道的には「差別」は許されないとしながら、ことばとして「差別化」という日本語をプラス価値をとるものとして生み出されてきた社会やマスコミ・経済業界が悔やまれてならない。英語圏の経済用語の訳語由来としても、「特長化」「特立化」「相異化」など、置き換えの可能性を論議すべきであったと思う。

（こばやし・ちぐさ 元東海大学教授）